

# 現代版「里山」に注目する

押谷 一

『木曾路はすべて山の中である』の書き出しで始まる島崎藤村の小説「夜明け前」は幕末から明治のはじめの山村の物語である。江戸時代、木材は重要な建築資材であることから山林は将軍家や藩が所有し、厳重に管理されていた。木曾の天領（幕府の所有林）では無断で木を伐採すると「木一本、首一つ」といわれるほど厳しい「留山・留木制度」によって地域の人びとの伐採が禁じられていた。物語の主人公・半蔵は、木曾中山道・馬籠宿の本陣、庄屋の一七代目の当主であるが山林の材木を村人が自由に伐採して売却することができれば村人の生活が豊かになると考えており、明治維新の王政復古に期待していたが、理想と現実との狭間で失望する姿を描いている。この小説は、明治維新の王政復古に対する人びとの夢と現実のギャップや日本の地域社会における伝統、さらには明治維新による近代化の問題点を示している。

ところで小説で描かれている当時の人びとの炊事や風呂の焚きつけのエネルギーは昔話「ももたろう」で語られる『おじいさんは山へ柴（しば）刈りに行きました』の「柴」である。柴は山林のなかに落ちている雑木や枝の総称のことで、立木を伐採することなく、また薪割りや乾燥の必要はなく、山林から採ってくればそのまま燃料として使うことができた。おじいさんがかけたこのような山

林は「里山」と呼ばれ、村人が共同で管理し、伐採以外であれば自由に柴を取り、山野草を摘み、きのこや木の実を集めることができた。このような里山は現代的にいえば集落や人里に隣接して人間の影響を受けた二次的な自然生態系である。環境省は里山（里地里山）とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域とし、農林業などに伴うさまざまな人びとの働きかけを通じて環境が形成・維持されてきた地域としている。

ところが化石燃料の普及による薪や炭の需要減少や、化学肥料の普及による森林由来の堆肥需要の減少によって森林の管理放棄、さらには高齢化や農林業の担い手減少に伴う耕作放棄地が増加し野生鳥獣の餌場となって人との接触が増え、里山の生物多様性も失われている。

国立環境研究所の深澤圭太氏などによれば里山は一万年前からいに最終氷期が終わる温暖化によって森林が発達し、縄文人が野焼きや焼き畑などにより植生管理が行われ、弥生時代以降、牧畜や水稲栽培、さらに古墳時代以降は製鉄や製陶などエネルギー集約的な生産活動も行われるようになり周辺の草地や雑木林は飼料、燃料や肥料などを採取する場として維持され、多くの生物が生息する里山が成立していったとしている。ところが日本の

国土面積のおよそ七割を占める一方で、人口の1%が生活している中山間地では高齢化や担い手不足によって管理されない里山が増えている。

こうした里山の役割を見直そうと環境省と国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-IAS）が共同でSATOYAMA イニシアティブを提唱している。里山はさまざまな動物、昆虫などの生物が豊かな生態系をつくっていることや、樹木はエネルギー消費に伴って発生する二酸化炭素を吸収してくれる働きによって温暖化を防ぐ効果もあるので改めてその価値が見直されている。このような里山を地域の人びとの手によって保全しようという動きもみられる。

例えば、北海道・北広島団地のボランティアグループ「里見緑地を守る会・どんぐり」は、一九六〇年代に開発された住宅地の外周部（市有地）の自然環境を一五年前から自ら整備・保全し、専門業者並みに遊歩道を整備してきた。ところが市は任意団体には「公園施設設置許可」を認めないことや、遊歩道の事故責任の所在についての考えに齟齬があったが、ようやく市から許可され、遊歩道の草刈りや公園施設の安全点検を「公園等里親制度」で委託されることになった。里山は人びとの関わりによって生態系が守られると同時に野外で整備に関わるボランティアはもちろん、自然が残された遊歩道を散歩することは近隣住民の健康増進にもつながる。いわば現代版の里山である。伝統的な地域の土地所有・管理形態を尊重した上で自然資源の新たな共同管理（コモンズ）のあり方を示している。このような里親制度に改めて注目したい。

へおしたに はじめ、酪農学園大学名誉教授